

---

# 永久への想い

紅蘭リト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永久への想い

### 【Zコード】

Z2054F

### 【作者名】

紅蘭リト

### 【あらすじ】

もしも神様がいるのだとしたら。あの人を助けて下さい。過去の恋と後悔を引きずる少女は過去を塗り替えようと語り始める。少女は、真実に巡りつく。

## 第1話・今も空を見つめて…

貴方は今でも私の事を覚えてますか？  
少しでも貴方の人生の記憶の端っこに

私という存在がいたという事を覚えていてほしい。

あの頃の私は幼くて、貴方を苦しめていたなんて分からなかつた。  
でも、私が貴方を愛していたという事だけは分かつて下さい。

「唯愛？早くしないと遅刻するよ？」

空は高く、見上げても果てしなく続していく。

貴方はこの空の続く場所にいますか？

「うん！待つて、すぐ行くから！」

夏が終わり、肌寒くなつたこの季節はどうにも唯愛は馴染めなかつた。

「もう！唯愛がゆっくり空なんか見てるから遅刻するでしょ…」

「ごめんつて！」

秋華しあわは走りながら唯愛を小突いた。

学校に着いた頃には、体が熱つていた。

「唯愛はいつも空見てるんだから。」

屋上でお昼を食べていると秋華は唯愛を軽く睨んだ。

「うん、よく空見てるよね。」

周りの取巻きも唯愛をじいっと見つめた。

真昼のこの時間は季節の変わり目でも暖かく、  
皆の視線が集まると体のしんから暑くなつた。

「いや…えつと…」

「ああ。あれか。愛しの恋人が空の向つに居るってか。」

取巻きの一人はイヤラシイ笑い方をして唯愛を見た。

唯愛は目を見開き、食べかけのパンを落とした。

「唯愛？」

体が硬直し、ずっと蓋をしていた思いがこみ上げてくる。

「あ…」

唯愛は急いで落としたパンを拾い上げ引きつった笑顔を作った。

「図星…なんかあつたの？」

取巻きの1人が唯愛に問いかけた。

それを、秋華が止めた。

「人には聞いて欲しくない事もあるんだよ。」

「秋華、ありがとう。大丈夫だよ。」

唯愛は空を見上げ、手をうんと伸ばした。

「私の恋人だつた人はね…」

## 第2話・桜の咲く日の想い…

青く晴れた日に2人は出会った。

中学1年の春。

新しい街に引越し、どこにでもある市立校に入学した。周りは小学校からの知り合いなのだろう、仲よさそうに会話しているのを唯愛はよく覚えていた。

緊張と不安が渦を巻き俯いてただ椅子に座つて大人しくしていた。

そのとき、ガタンと座っていた椅子が揺れ唯愛は勢いよく椅子から落ちた。

驚いたときには倒れていた。

「やべ！」

まだ声も変わっていない幼い声が上から聞こえた。

「痛い…！」

ひねつたのか足が痛く起き上がるうとしても足が思うように動かなかつた。

「おい！大丈夫か！？」

涙をためた目で上を見ると、小柄な男の子が唯愛の顔を覗いていた。

「何してんだよ、渚音！」

騒がしかつた教室も唯愛がこけた事でしんと静まりかえった。

「分かつてるよー」「ごめん。立てる？」

渚音と呼ばれた男の子は手を差し出してきた。

男子に連れられて保健室に行つた。

先生に入学式に何してるの。と男の子は散々に怒鳴られていた。

「あの…さ。ごめん。」

唯愛の不安が一気に溢れ出し、静かに泣いた。

「…そんなに痛い？」「ごめん。」

唯愛は首を振った。

泣くほど痛い訳じゃない。ただ不安で。怖くて。  
この子に嫌われると思った。  
嫌われるのが怖い。  
だから、ずっと良い子でいて。

「大丈夫？」

唯愛が顔を上げると男の子が優しく笑っていた。

「うん…」

唯愛が頷くと男の子は唯愛の頭を撫でた。

「お前、妹に似てるわあ。」

「なにそれ。」

2人はお互いに笑い合つた。

入学式に出ていない事で2人の両親が保健室に来ると、男の子は更に怒られていた。

「ごめんね…？」

「俺が悪いんじゃん。」

優しい顔をすると男の子は一コリと笑つた。

「浅木渚音。宜しく。」

「天見唯愛です。」

桜が咲き乱れる中で2人は笑い合つた。

子犬のようによく笑い、ふわふわした髪の渚音。

大人しく、妹に似ている唯愛。

それが2人の印象だった。

「まあたお前と同じクラスかよ。」

渚音はわざとらしく深くため息をついた。

「それは私のセリフ！バカ渚音にの面倒見たくないわ。」

唯愛もわざとらしく深くため息をついた。

「面倒…？お前に面倒見てもらつた覚えはねえな。」

「あら。 さうかしら？ノート見せたり？バカな事をしたのを先生に上手く言つてあげたり？感謝する事あるんじゃないの？」  
唯愛が意地悪そうに笑うと渚音は苦笑いを浮かべた。

「3年間同じクラスつてどんだけだよ。 なあ、天見。」

仲がよかつたが渚音はいつしか苗字で唯愛を呼ぶようになつていた。  
「だよね。ここまで来ると怖いね。 しかも渚音と、つて…」

唯愛はふざけて言った。

「なんだよそれ！てかさ。 いい加減苗字で呼べよ。  
からかわれるの分かつてんだろ。」

「はいはい。」

唯愛は子供をなだめるように返事をした。

家に帰ると自分の部屋に駆け上がりベッドに飛び込んだ。  
本当はずつと同じクラスで嬉しかった。

渚音とずつと呼びたい。

苗字じゃなくて唯愛つて昔みたいに呼んでほしい。  
唯愛は寝ころびながら天井を見た。

「私はずっと渚音が好きなんだ…」

手で顔をおさえた。

ずっと渚音は友達だった。

いつからだろう。

こんなに好きなのになんで今まで気づかなかつたのだひつ。

ねえ。  
渚音。

伝えたい事がいつぱいあるよ…

### 第3話・もう隣にいない貴方へ…

「唯愛ー同じクラスだねー！」

中学も同じだつた秋華は当時から仲がよかつた。

「うん。宜しくね！」

「てかさ。また浅木君と同じクラスじゃん。

好きなんでしょう？最近人気あるんだから早く告白しちゃいなよー！」

秋華はあきれたように渚音を指さした。

入学当初と比べるとずつと背も高くなり、

人気があるのも分かるような気がした。

唯愛にとつてずっと見てきたはずの渚音もいつしか変わっていた。

ただ、時々みせるはにかんだ笑顔などは何ひとつ変わってはいない。

そう、思いたかった。

自分だけが知っている渚音で居て欲しかつた。

「わがままだよね…」

「え？」

「あ、ごめん。何でもないのーそういうえば、なんで渚音が好きって  
しつてるわけー！！」

「見てたら分かるわよ。」

秋華はニヤリと笑い唯愛の頬っぺたをつついた。

「あのーーー浅木先輩居ますか？」

昼休み教室でお弁当を開いている

2年生くらいだろうか。

小柄な女の子が真っ赤な顔をして唯愛に訪ねてきた。

「うん、居るよ。」

秋華は唯愛を押しのけて返事をした。

「浅木くーんーお客様なんだよーーー！」

秋華の声に面倒をついて渚音は女の子と一緒に

教室を出て行った。

「告白かな？」

「私に聞かないでよ。」

告白に決まつてゐる。

私には分かる。

だからあの子の質問にも答えられなかつた。  
意地悪だつて分かつてゐる。

でも、私から渚音を取らないで…

渚音は昼休みが終わる頃に帰つてきた。

「浅木！何の話だつたの？」

勢いに任せて唯愛は渚音に訪ねた。

「秘密？」

「ふざけないで…」

「何怒つてんの？ただの告白だよ。」

唯愛は田を見開いた。

やつぱり。

だから嫌だつたの。

「怒つてないよ…それでどうしたの？」

「もちろん付き合つに決まつてんじやん。断る理由ないだろ？」

「全然知らない子じやん…」

渚音はため息をついた。

「俺が誰と付き合おうがお前とは関係ないだろ。」

私を見てほしーの。

渚音：

もつ、私を見てくれないの？

私はひどい女である子なんていなくなれって  
ずっと思つちやう。

渚音…嫌だよ…

「トイレ行つて来る。」

静かに立ち上がり教室を出た。

「唯愛！大丈夫？」

唯愛は秋華に背を向けながら泣いた。  
震えが止まらずに足ががくがくと揺れ、  
立つてゐるのがやつとだつた。

「私、渚音が好きだよ…。でも、あの子と付き合つて事は  
私の事好きじやないつて事でしょ？」

秋華は唯愛を抱きしめた。

「汚いの…渚音が私の傍に居てほしいつて…  
私だけを見てほしいつて…  
もう、やだよ。」

「汚くないよ。好きなら普通だよ…」

唯愛は抱きしめる秋華を押しのけた。

「私おかしいよ…」

あの子なんて…つて思つちゃうし

渚音だつて私の事可笑しいつて思つよー」

涙でぐしゃぐしゃになつた顔が更にゆがんだ。

「そんな事じやなくて…

悔しいの…なんで私じやないの？

こんなに好きなのに…

嫌だよ…！」

素直になりたい。

でも、なれなくて。

伝えたいのに、言葉にできなくて。  
私は今も手を伸ばしてみたいの…

## 第4話・出会わなければ良かつたね…

好きだといつ気持ちは時には  
蓋をしなければいけない時がある。

悩んで悩んで

苦しくて

声が枯れるまで泣いたとしても  
気持ちを抑えるのがどんなに辛い事か。  
自分を言い聞かせ、前を向くのが強さといふなら  
私には一生強さはないのだろう。

「唯愛！いい加減にしなよ。好きな人に彼女が出来て  
辛いのは当たり前だよ？」

好きだからこそ隣にいなくても笑ってあげるのがアンタの  
出来る事じゃないの？」

秋華は唯愛の肩をしつかりとつかんだ。

「好きなのにバイバイしなきゃ駄目なの？」

そんなの可笑しいよ…！」

「それなら！好きだからって人の幸せを  
奪つてもいいわけ！」

あの子は浅木君が好きで勇気を出してやつと付き合ったんだよ？」

「秋華は私の味方じゃないの！？」

違うそうじゃなくて…

私が悔しいのは

気持ちを伝えられない自分がもどかしいから。

好き

それをあの子は言つた。

私が言えなかつた言葉をあの子は言つた。

もし、それを私の方が早く言えていたら  
私の事を見ていてくれたのだろうか。

「『めん…。秋華に当たつてた…。』

悔しいからつて秋華にやつ当たりなんかして。  
ひどい事した。

秋華はまたゆつくりと唯愛を抱きしめた。

唯愛は大声で泣き叫び

秋華を力強く抱きしめた。

廊下に響くチャイムが虚しくこだましていた。

昼休みが終わり五時間目の授業が始まったのだからつ。  
騒がしかつた中庭も静かになつていた。

「『めんね…。秋華は教室戻りなよ。

私は目腫れちゃつたから教室戻れないし。』

唯愛は寂しそうに笑つた。

「今日は唯愛の傍に居てあげる。

秋華は唯愛の頭を撫でた。  
今ここを離れたら駄目だ。

秋華は心の端つこでそう思つた。

「天見！横田！何してる。」

2人を探しに来た担任は長々と説教をし  
保健室に行けと背中を押した。

「先生。氷ちょうどだい。」

「どうしたの。目腫れてるじゃない。」

「失恋したの。」

保健の先生は急いで袋に氷をつめ唯愛に差し出した。

「横田さんは早く教室に戻りなさい。」

秋華はしぶしぶ教室へ戻つて行つた。

「大丈夫よ。腫れがひくまでゆっくりしていなさい。」

先生の言葉に唯愛はまた涙を流し、目を瞑つた。

夕田を見た日には夢を語ってくれた渚音は今でも同じ夢を追い続いているだろうか。

唯愛が田を開けた頃には夕田で部屋が照らされていた。

「よく寝てたわね。うん、腫れもひいてる。これ以上遅くならないように早く帰りなさい。」

先生は優しく笑つて唯愛を見送つた。

学校を出ると唯愛は一人でゆっくりと歩き始めた。1歩1歩に力をこめて。

「おい！ 天見！」

聞きなれた声が唯愛を呼び止めた。

歩くのをやめ、振り返ると渚音があの女の子と立っていた。

「お前あれから帰つてこないし、

横田に聞いたら保健室にいるとか言つし。」

「ごめん。ちょっと体調悪くなつただけだから。」

「あの！ 私2年の多賀谷志乃  
つて言います！」

渚音の隣にいた女の子は恥ずかしそうに唯愛に名前を告げた。

「天見唯愛です。」

唯愛は志乃に対する怒りを抑えながら名前を告げた。  
志乃是可愛らしく唯愛に笑いかけ、  
渚音の顔を見上げた。

「大丈夫ならいいや。志乃帰ろう。」

渚音と志乃是唯愛に背を向け歩きだした。

私じゃなくて多賀谷さんを名前で呼んでる。

名前で呼ぶのは私だけでいてほしい。

でも、私は苗字で多賀谷さんは名前。

悔しいよ。

私は渚音の何？

私は渚音の支えでありたいの。

唯愛は2人が見えなくなつても見つめ続けた。

もう、渚音なんて忘れない。

自分が自分でなくなるくらいなら

渚音なんて忘れない。

こんな思いをするなら渚音と出会わなければ良かつたね…。

## 第5話・許せない想い…

「ん…」

朝日が眩し過ぎて唯愛は眠たそうに目を開けた。泣き過ぎて目は重く、なんだか体も重く感じた。

「唯愛一起きなさいよ。」

母親の声を無視して布団を被る。

軽やかに階段を上がる音がして部屋を開ける。

「ゆい。いい加減にしなさい。」

布団を取られて、嫌々ながら唯愛は学校へ向かった。

「唯愛？顔色悪いよ。」

秋華は唯愛の頭を撫でた。

「よく学校に来たね。」

唯愛は静かに涙を流した。

「嫌だよ…。本当は学校に行きたくないよ…」

「でも。よく来たね？」

秋華は優しい。

何時も甘えちゃう。

ごめんね？

「無理やり起こされたの。」

「やがね。唯愛ママー。」

秋華は楽しそうに笑つた。

「よつス。」

何もなかつたよつて渚音は明るく教室に入つて來た。

「天見、おはよ。」

「……ねえよ……」

優しくしないで。

思いだしちゃうから。

だから、

私をほうつておいて。

唯愛は小さく挨拶をした。

渚音の鞄から見えた携帯には、女の子らしいストラップが見えた。

「あの」とお揃いなんだ…

もし

願いが叶うなら

少し前に戻りたい。

ゲームのようにじっくりして。

でも、出来ない。

それは分かってる。

分かってるからこそ、辛い…

「 もう、嫌になっちゃう。」

唯愛は机に突っ伏した。

授業はつまらなく、唯愛はほうつとしていた。

ふと、渚音を見るといし色素の薄いふわふわとした髪を靡かせ寝ていた。

「 浅木。起きなよ。」

唯愛は冷たい田で渚音を起こした。

「 んー？」

渚音は小さく伸びをし、起きた。

起こしたのは少しでも私を見てほしいから。

唯愛は軽くとグッと握りこぶしを作った。

諦めるはずなの。

だから

渚音は見てはいけない。

忘れなきや。

このままなのは絶対に駄目。強くならなきや。  
だけど、諦める方法も足元も真っ暗なにじりじりして前を向くの。

「唯愛ー？お皿どうする？」

「購買行ってくるね。」

唯愛が購買に行くと、渚音と志乃が笑い合って歩いていた。  
幸せそうに笑っているのを見た唯愛は、何時までも二人を見つめて  
いた。

購買でパンを買い、教室にもどった。

「唯愛！」

秋華はあせつたように唯愛を教室の端のほうに  
連れて行った。

「秋華…？」

「唯愛…。落ち着いてきてね？」

唯愛はしばらく秋華の顔を見つめてから  
うなずいた。

「後輩に聞いたんだけど…。

浅木君と付き合つてる子……。」「

唯愛は目を見開き、教室を飛び出した。

向かう先はあの子の所。

許せない。

渚音を利用するなんて…

私は許さない。

## 第6話・もりご縁…

許す事ができない事も  
いつのまにか忘れるときがたまにある。  
でも、

それは心のどこかで許していたと言つて事なのだりつ。

「天見？」

教室を飛び出してしばらぐすると渚音とばったり会った。

「…あの子は？」

「あの子？」

「多賀谷つて子…」

渚音は唯愛を軽く睨んだ。

「志乃がどうした？」

秋華は確かに言つた。

「浅木君と付き合つてる子…」

金持ちの大学生と付き合つてゐるらしいよ？

でも、最近別れ話が出てるらしくて…。

浅木君と一緒にいれば相手が妬いてよりをもどせるかもつて…。

ここからは私の想像。

金持ちの彼氏を手放す訳がないし。」「

「どうして渚音なの…？」

「分からぬよ。

でも、浅木君と何があるのかもね？」

「浅木は利用されてるんだよ…」「

「はあ？志乃が俺を利用してるって？」

渚音はあきれたように笑つた。

「あの子には他に彼氏がいるんだよ?」

「ふざけた事言ひなよ。」

「轟」の二三事

「然れど、今前は阿ヅシーハシギー。」

黒れよ！お前は何かしたいんだよ

最氏  
ごば。

これ以上志乃を侮辱してみろ。

許せねえからな。」

清音は強く唯憂を睨み怒鳴り一喝た

渚音は立ち去つた。

「嘘……私が悪いの……？」

唯辯にその場にひまぐれ

大古で立きりび

周りの人を気にせず泣き続けた。

利はたな清音のかみは言ふがたけなのほ

卷之三

ただ、私よりあの子のほうが早く

好きだと言つただけだと思つてた。

思つてしたがつた

者音こ嫌われて。

最低と言われて。

そんなにすぐに崩れる絆だったというのが哀しくて。

「嫌だよ…！！！」

悔しくて。

すぐに泣いてしまう自分が情けなくて。

「天見！何してる！」

先生の声にハッとし、唯愛は涙を拭き立ち上がった。  
「何があつた？こんな所で大泣きして、  
迷惑をかけているとは考えないのか？」

頭ごなしに怒鳴る先生を横目に唯愛は走り去った。  
今はただ哀しくて泣き叫んだ。

だけど、すごく恥ずかしいことや…

「ほんと情けない…」

気持ちがすぐ行動に出てしまつ、幼児のよつだ。  
あまりにも、恥ずかしい。

悔しくて  
ショックで

哀しくて

どうしようもない。

甘えていてもしようがない。

あの子が好きなら必死に自分のものにして。  
泣いて「ごめん」なんて言つても許さない。  
渚音が傷つくところは見たくなり。

でも、最低と言つた貴方をそう簡単に許す事はできない。  
私が悪いなんて思わない。

私は私なりに渚音を守つたつもりだったから。  
すぐには最低だなんて言えるほど

私たちの絆。

負ける訳にはいかない。

何て言われても私は渚音の  
涙をみたくないから

諸音を助けたいの  
⋮

## 第7話・伝えたい想いは言葉で…

どうか渚音が悲しませんように…

燃えるように赤い夕日が沈むとき渚音が話した夢。

「俺も、将来の夢つてのがずーっとなかつた。

でも、皆と騒いで笑つて泣いて…。

これが何時かなくなつてしまつ、消えてしまつて。

それが怖いと思った。

だから。

将来の夢つて言つほど重いことではないけど

今の夢は少しでも長くこうして居られる事なんだよな…

恥ずかしそうにハニカミながら話した渚音の事は何時までも忘れない。

だけどね。

私の中にあつた短い『渚音との絆』は

もう消えてしまったのかな?

違つ。

もともと私達には絆と言えるほどのはなかつた…それが死ぬほど悔しい。

私はもうと頑張れた…

唯愛はそのまま家に帰つた。

家には誰も居ず、ただ生暖かい空気が漂つていた。

「また腫れちゃつた…」

ポツリと呟いた言葉は、虚しく消えていった。

唯愛は目を冷やしながらテレビをつけた。

なにか音がないと駄目になるような気がした。

何度か見たことがある政治家が難しい言葉を話している。それに耳を傾けながらぼうつとしていると

携帯がうるさく鳴り始めた。

「…はい…？」

「唯愛！？今ドコ！？」

息を切らした秋華の声がする。

「家…。」

「そつか…。先生カンカンで唯愛の家に電話かけに職員室に行つてるの。」

秋華が話すとたんに家の電話が鳴った。

「ごめんね…？落ち着こつと思つたけどなんか…。」

「ううん。良いよ？」

どれくらい沈黙が続いた。

沈黙を破つたのは唯愛だった。

「…話。聞いてくれる？」

涙で潤んだ目は今にも涙がこぼれそうだった。

「もちろんだよ。」

秋華の優しい声に唯愛は安心した。

「唯愛？」

ちょうど学校が終わつた時間に秋華はやつてきた。

ドアを開けると少し髪が乱れた秋華が居た。

走つて来たのだろう、息も少し荒かつた。

秋華をリビングに案内した。

「大丈夫？顔色悪いし…。」

「大丈夫だよ。ちょっと落ち着いたし。」

唯愛は力なく笑い、テレビを消した。

しんとした部屋はなんだか虚しかつた。

「あのね…。」

唯愛は話し出した。

「そつかあ…。うん。浅木君の言つことも分かる。  
自分の恋人の事を悪く言われたら怒るよね。  
自分が知らないことを言われたらなお更。」

唯愛は俯いた。

「だから。

分かつてあげよう?

唯愛の事が嫌いだから言つた訳じゃないから。大丈夫だよ。  
浅木君の気持ちは私より唯愛の方が知ってるでしょ?」

「…分かるよ? 私だつて渚音が最低だつて言つ理由分かるのに…  
なのに先走っちゃつて、怒らせた。

だけどそれが悪かったなんて思いたくない…。

悪いって思つたら、本当に駄目になりそうで…」

唯愛は小さな身体を震わせていた。

「唯愛は浅木君の気持ちを分かつてあげてる。

なら、今はそれで良いと思うよ。

浅木君にも唯愛の気持ちを分かつてもらうべきだよ。  
唯愛は分かつてあげてるのに

「浅木君は分かつてくれないのは、駄目だと思つから。」

秋華が優しく笑うと唯愛は泣いてしまう。

秋華が親友でいてくれる。

それが力になる。

「私はどうしたら良いの…?」

許せないの。

あの子の事も渚音の事も。

分かつてはるはずなのに…!」

「それつて、自分を許せないんぢゃないの?」

2人を許せないんじゃなくて？

唯愛ただ涙を流した。

「謝りうつ？」

まずは、謝つて唯愛の気持ちを伝えよう？

好きつて言わなくても良いから。

あの子の事を侮辱した訳じゃないって言つ。

唯愛。

大丈夫。

私は唯愛の見方だから。」

唯愛は泣き続けた。

ありがとつ。

と、言いながら。

本当に伝えたい事は口で言つ。

心の中で言つのは何も云わらない。

だから。

たくさんのがとつと共に  
気持ちを伝えるんだ。

## 第8話・感謝と恨み

明日は笑って過ごせるように  
悔いが残らないように  
毎日の精一杯努力をする。  
辛いことはきっと意味のあることだから。

秋華が帰った後、

担任や両親にこっぴどく怒られた。

だけど、そんな事はまったく気にならないくらい  
唯愛は渚音の事を考えていた。

謝らなければいけない。

これも、全て自分が先走ったせいで。と、  
唯愛はただ俯く事しかできなかつた。

部屋に戻ると携帯を握り締め、じいっと見つめた。  
謝るのをやめようか。そんな思いが頭をよぎる。  
だけど謝らない限りこれは終わる事はなくて。  
逃げてしまいたい。

自分を裏切っているかもしない恋人を好きだと言つ渚音。  
もし、その想いが裏切られるような事があれば  
渚音はどうするのだろう？

涙を流すのかもしれない。

ただ、偶然と立ちつくすのかもしれない。  
崩れてしまうのかもしれない。

どれにしろ、

傷つくに決まっているのだろう。

そんな渚音を見たくない。

それだけなのに、『最低』だと言われてそれが簡単に

「ごめんなさい」

なんて言える訳がない。

だけど、唯愛が渚音を傷つけた事には変わりはないと  
唯愛は小さく呟いた。

少しの間でも、先に告白すれば付き合えたと思いたい。  
志乃の事が好きだなんて思いたくない。

ただ、先に告白しただけ。

まだチャンスはある。と思いたい。

でも、

渚音はあの子が好き。

そう言ったんだ。

本当に好きなら、その人の笑顔を、幸せを  
願うものだ。

だから、渚音が笑っているならそれでいい。

唯愛はふっと笑った。

「その代わり渚音を悲しませたら許さないから。」

渚音が好きだから、幸せになつてほしい。

だからこそ

自分が嫌われても渚音が悲しまないよう  
志乃をなんとかしなければいけない。と唯愛は心に決めた。

「そのためにも謝らないと…。」

唯愛は携帯の番号を押し始めた。

唯愛は学校の近くの公園に向かつた。

「…もしもし？ 天見？」

「あ……えと……話せるかな?」

「今から?」

「…出来れば…。」

「ここけど。どうで?」

やはり渚音の声は低く冷たかった。

「…学校の近くの公園でいいかな?」

「分かった。今からでいいか?」

「うん。…ありがとう。」

唯愛は歩くのを止めた。  
やはり会いにくる。

だけど、前を向くしかない。と、歩き始めた。

唯愛が公園に着いた頃には渚音はブランコに座っていた。

「…浅木…。」

小さな声で唯愛が呼ぶと渚音はハツと唯愛を見た。

「隣…。いいかな?」

「あ…ああ。」

唯愛は渚音の隣のブランコに座った。

2人は目をあわす事も話すこともせず、  
ただブランコを揺らしていた。

「今日は…」

「…めん。」

唯愛は顔を真っ赤にして話しだした。

「勝手な事を言つて…。」

本当にごめん。

…。多賀谷さんを馬鹿にしたり、侮辱した訳じゃなくて…。  
確かにお前にはムカついたし、

でも、俺もカツとして。それは悪かつたと思つ。」

渚音は唯愛をじっと見た。

「俺は、天見を許せない。」

唯愛は田を見開いた。

「え…？」

「志乃のことが好きだから。お前が侮辱した訳じゃないとしても、軽はずみだったとしても許せない。」  
違う。

どうして許されない。

確かに悪いことをした。

なのに、謝ったのに、どうして。

渚音が謝るべきじゃないのか。

唯愛の頭にいろいろなことが流れこむ。

「いやあ…！」

唯愛は頭を抱えた。

「私は謝った…！分かってよ！私は分かってるのにどうして分かってくれないの…！？」

「おい！天見？」

渚音は立ち上がり唯愛に駆け寄った。

「嫌だよ…」

「天見！」

ただ。

志乃に謝つてほしいと思つただけなのに。  
志乃に謝れば許すと言つはずなのに。

渚音は心の中で叫んだ。

「どうして…私が全部悪いの？」

「天見…。」

渚音は壊れていく唯愛をただ見つめる。

「天見。天見。天見。」

名前を呼び続けるが、唯愛の耳には届かない。

「…唯愛。」

ピタリと唯愛の声が止まつた。

「唯愛。」

唯愛は涙に濡れた顔で渚音を見つめた。

「志乃に謝れ。そしたら許すから…。」

「許してくれるの？分かってくれるの？」

「分かるよ。お前がどうしてあんな事を言つたのか分からない。でも、今回は志乃に謝る事で許してやる。」

「私の気持ちは分かつ…」

「分かるから。だから、落ち着け？」

涙はなくなりはしないのだろうか？

泣きすぎたけど、涙は枯れないで泣こうとおもつたら  
いつでも涙がながれる。

嫌でも泣ける。

涙は枯れてはくれないのだろうか？

「てか、俺偉そうだな。『ごめんな。』

渚音はしゃがみこんだ。

恥ずかしそうに髪をいじった。

「ごめんね…。」

唯愛の小さな謝罪に耳を傾けながら空を見上げた。

「俺、空好きだな。」

どこまでも続く空が好き。

広く青い空が好き。

高く澄んだ空が好き。

「なんか食いに行くか。」

渚音は空が好きだと小さい声で言い、  
打つて変わって明るく唯愛に笑いかけた。

唯愛には、なぜ空が好きだと呟いたのか分からなかつたが、

食べに行こうと言つてくれたのが何よりも嬉しく思った。

「うん！」

唯愛と渚音は近くのファーストフード店へ向かつた。  
「しょうがないから俺がおいつたる。」

「めずらしい…。」

「うつせーもしおいつてやうりねえ。」

「え！ごめんって。」

2人は以前のようにになっていた。

「気付けて帰れよ。」

「うん、バイバイ。」

もう、暗くなつた頃に唯愛は渚音と別れた。  
渚音は唯愛の家の近くまで送つて行つた。  
軽く手を上げて渚音は帰つていつた。

小さくなる背中に唯愛は叫んだ。

「『めんね…！…』

唯愛が夜道を帰つていると、

見たことのある影が通り過ぎた。

ばつと振り返ると、志乃の姿が見えた。

追いかけようとすると、志乃は背の高い人と手をつけないだ。

「志乃。好きだよ？

前に別れようつて言つて悪かつたな。」

「いいよ。私が好きなのは貴幸たかゆきなんだから。」

「じゃあ、あの男は？」

「友達だよ？」

『利用しただけ』

という言葉が頭に流れる。

あの男？

渚音のことには決まってる。

あいつが秋華のいう大学生の彼氏。

唯愛は2人の後ろ姿をただ見つめていた。

## 第9話・カタチだけの愛…

身体が勝手に動く。

頭は真っ白で

体は硬直してゐるはずなのに動いた。

気付いたときには志乃の前に飛び出していた。

「多賀谷さん…？」

「え…？」

男はうつとうしそうに唯愛を見て、首をかしげながら志乃を見た。

「貴女にとつて浅木渚音はなんなの？」

何故か口が動く。

また、先走つてゐる。

駄目だ。またやつちやつてゐる。止まれ。唯愛の気持ちと裏腹に口が動く。

「天見…先輩ですか？ 貴女こそ急になんですか？」

「私が聞いてるんでしょ。」

男が何かを言おうと口を開く。

しかし、志乃がそれを止めた。

「貴女に関係ないと思ひます。でもあえて言つなら渚音先輩は、友達です。」

「付き合つてんじやないの？」

「さつきから何言つてんの、君。消えてくんない？」

男は冷たい目をした。

「確かに私は渚音先輩に好きだと言つたかも知れない。でも、本氣にするなんて馬鹿馬鹿しいですよね？ そつぱ思ひません？」  
人の気持ちをもてあそんで。

「普通、好きだと言われたら信じるでしょう。一緒にいると付き合つ  
事じゃないの…！？」

「へえ。なら、渚音先輩は遊びですね。そんな人とは釣り合わないんですよ。あんな人。」

ふざけるな。

ふざけるな。

ふざけるな。

ふざけるな。

「利用したなんて変な事言わないで下さいね?向こうがおかしいんだから。」

「…アンタが可笑しいんでしょ。」

唯愛は大きく目を開き、次の途端冷たい目で志乃にらんだ。

「…それを、利用したっていうんじゃないの!…?その男が本命なんでしょう!…?なら、どうして渚音に手を出すのよ!…?言になさいよ!…!」

唯愛はジリジリと痛む喉から自分の声だとは思えないがらがら声で叫んだ。

「てめえ。黙れよ。」

低くドスのきいた声で男が言つ。

「良いよ。これは私の問題だから。」

志乃是渚音に見せた笑顔と全く同じ笑顔で男に笑いかけた。

男は渋々ながら、志乃に軽いキスを送り立ち去つた。

「私には好きな人がいた。それは本当です。」

志乃是冷静に悪びれもなく話し始める。

「渚音先輩は、ただ少しの間の『彼氏』です。」

「意味わからない。」

志乃是イヤらしく笑つてみせた。

「私は1人が嫌いなんです。寂しいのが嫌い。だから、一緒にいてくれるなら誰でも良かつた。それで彼氏も戻つてくるなら一石二鳥ですよ。」

志乃是ベラベラと息をつく間もなく話し続ける。

「渚音先輩がどんどん私にはまつていくのが分かつた。ホント馬鹿

馬鹿しいですよ。」「それが…」

「は?」「

「それが利用してる、って言つんじゃないの…!…バチつ!」

と、鈍い音がした。

「何すんのよ!!!」「

唯愛は志乃を叩いていた。

「そんな理由で渚音を傷つけて、アンタにそんな事する権利があるの!答えなさいよ!!」

涙で汚れた顔を必死に怖くみせた。

「アンタこそ!アンタに叩かれる筋合はないわよ!…廊下で泣き叫び、アンタこそこうやって別れさして渚音先輩と付き合つつもりなんでしょう!アンタだって自分が一番大切なんでしょう!…」志乃は思いつきり唯愛を叩いた。

「つ…！」

言い返す事はできなかつた。

渚音を守るためとか言って、でもそれは自分が渚音といたい気持ちからの行動。図星をつかれた。

唯愛が息を切らしながら悔しそうに顔をゆがめると、志乃も息を切らしながら勝ち誇ったように笑つた。

「ほら。アンタと同じじゃない。」

「ちがつ…。」

「何が違うのよ!…アンタだって、私を利用して渚音先輩と付き合おうとしてる!」

「もとはアンタがつ!…」

もとはアンタが悪い。そう言おうとした。

だけど、唯愛は言えなかつた。

悔しい。悔しい。

アイツが悪いのに。」

唯愛はまた涙が溢れそうになつた。

必死にそれを抑えた。

泣いたら負けだ、そう言つ気持ちがずっと心にあった。

「私は渚音に謝つて、別れてほしい。それは私のためじゃなくて、渚音を傷つけないために。」

「…そういうのがムカつくのよ。そこまでして…。気持ち悪い。」

踏みにじられた。

渚音に対する気持ちが。

唯愛は小さく舌打ちをした。

「私は確かに利用したと言われるかも知れない。でも、アンタほど根性腐つてないわよ。」志乃は強く唯愛をにらんだ。

「私が腐ってる？渚音先輩に言いつけますよ？」

アンタより私の方が信頼されてる。

だつて、渚音先輩は私が『好き』なんですね。」「やめてよ！」

なんで渚音に言つ必要があるのよ！？」

「私を侮辱したからです。」

きっと渚音先輩は怒りますよ？」

唯愛の頭に壊れしていくさつきの自分が浮かぶ。

渚音を傷つけて、泣き叫ぶ、可笑しくなった自分。

「自分の気持ちを伝えることもできないくせに。」

これ以上話す事がないなら失礼します。

『デート』中なんで。」

ただ、志乃の背中を見つめることしかできなかつた。そこに、愛しい影が見えた。

「渚音？」

「名字で呼べつて言つてるだろ？つか、不細工な顔。」

渚音は子供っぽく笑つたが、悲しそうに視線を落とした。

「ほら。携帯。俺のチャリのかごに入つたままだつたぞ。」

「…ありがとう。…いつからいたの…？」

「今さつきだよ。悪かつたな。お前の言つてたの、信じれば良かつたな。大丈夫か？」

渚音の方が辛いはずなのに明るく振る舞う渚音を唯愛は見ていました  
なかつた。

唯愛は背伸びをして精一杯手を伸ばし渚音を抱き締めた。

「何だよー。」

唯愛は句も言わずにただ涙を流し抱き締めた。  
「離せよ。」

「…辛いなら笑わないでよ…。見てる辛いよ…。」「めんね…」「めん…。」

渚音は少し抵抗をしながら唇へ唇へ離れて離れた。唯愛は「めん  
を小さな声で連呼した。

「離してくれ…。」

少しずつ渚音の声が鼻声になつてへる。

渚音は静かに涙を流し始めた。

「渚音。泣いてもいいんだよ…？」

唯愛の言葉をきに渚音は声をたて泣きはじめた。

「…ちく…しょ…」

唇をぐつと噛み、悔しいと呟く。

唯愛は何かできる訳ではないけれど、傍にいたこと思った。  
自分に対する罪悪感がある。

可哀想と同情する気持ちもある。

だから私が言ったのにとあきれる気持ちもある。

唯愛は色々な気持ちが混ざつ合つ。

「…ありがとう。」

どれくらいかたつた頃、渚音は「シラシ」と皿を擦りながら謝った。

そして、地べたに座り込んだ。唯愛もそれに合わせて座った。

「あのさ。俺、告白とかされたの初めてで。…自惚れてた。だからとか言い訳なつもりじゃないけど、アイツが好きでいてくれんなら俺も好きだつて思い込んでた。」

渚音は気まずそうに眉をしかめた。

「カツコ悪いけど、好きだつて言うのが裏切られた感じがした。それが悔しくて、情けなくて。」

渚音は空を見ながら立ち上がった。

「あ～あ。せっかく好きになろうとしたのに。情けない。」

「…あの子の事、好きじゃなかつたの…？」

唯愛は渚音を見上げた。

「どうなんだろ…。今になつてはわからない。」

でも…

渚音は小さな声で続けた。

「アイツがほんの少しでも、俺が好きだつて、居てくれてよかつたって思つてくれるならそれで良いと思う。アイツが許せないとしても、少しでも好きかなつて思つた奴が幸せに、笑つてくれんならそれで良い。」

「馬鹿じやないの…。」

少しでも心通わせた人よ、どうか幸せで。

どうか笑顔で。

形にはまったく愛なんて寂し過ぎる。

傷ついて、傷つかせ、涙を流す。

一人ひとり違う思いを持つて、違う形を持つことで心通わせる。想い人は傷く『はかなぐ』散つていくものだから。

だから、今を大切にして傍にいる人を愛す。

少しでも心通わせた人よ。どうか、幸せで。

どうか、笑顔で。

たつた一つ願いが叶うなら、2人で過ごした楽しい思い出を少しでも覚えていてほしい。

どうして、俺なのだろうか。

どうして、好きだと言ったのだろうか。  
どうして、寄り添ってきたのだろうか。

疑問はぬきなー。

だけど、はっきりと分かっているのは俺は彼女に溺れていたんだ。

「渚音？」

「ん…？」ちゃんと言つてきましたよ。」

渚音が別れを告げると、志乃是気が済むまで怒鳴り散らした。  
志乃の叫びは渚音に対してもなくどこかあの男への報われないおもいだつた。

ただ、あの男が好きだったから別れたくなかつた。  
だから、渚音を利用した。

それが悪いことだつて分かつていた。

それをどうしたらいいのか分からぬ子供のように怒鳴つていた。  
渚音は哀れそうに、どこか愛おしそうに志乃を見つめていた。  
志乃是好きなだけ怒鳴ると、「ん…。」と

小さくうなづき立ち去つた。

それは別れを受け入れたといつ返事なのか、  
ありがとうか、

渚音を恨むことなかの渚音は分からなかつたが  
悲しそうに笑つた。

「多賀谷ってさ、ただ寂しかつたんだろうな。

ちょうど俺がいたから俺を選んだだけなのかもな。」

もう『志乃』と呼ばない渚音を唯愛は見つめることしかできなかつた。

寂しい。

寂しい。

別れたくない。

傍にいたい。

志乃の想いはそれだけだつた。

「お前にも悪い事したな。ごめん。」

渚音はゆっくりと空を見上げた。

「ありがとう。」ありがとう。

傍にいてくれてありがとう。

渚音はそう呟いた。

「キザ！」

「あ？ せっかく礼言つてやつてるんだろ！」

いつも通りちょっとした事で言い合いでして、最後は笑い合ひ。  
そんな当たり前な事が唯愛にとっては幸せな事だつた。

簡単なものこそ難しくて、壊れやすい。

時間がかかるて築いたものも、壊そうとすれば直ぐに壊れる。  
それほど人は優柔不斷で、バカな生き物なのかも知れない。  
そんな所も含めて、人間は愛しいもの。

それを分かつている人間が一番強い。

「ねえ…？ 人間てもろいものだね？」

渚音はじいっと唯愛を見つめた。

「だな…。だからこそ面白いんじゃね？」

「ははっ！ ！ そうだね！ ！」

渚音は携帯を取り出し、あの女のナリシーストラップを引寄せた。

いろんな色のビーズが飛び散る。

「もう、いらねえな。」

面白そうに笑う渚音は出合った頃とは変わらなかつた。

「おひひー。」

渚音はストラップを窓から投げた。

そして、携帯をいじつた。

「アドレスもゼーンぶ消したし、ストラップもないしうつきりした。」

放課後だと言つても、もう遅く残つているのは  
グランドにいる野球部くらいだつた。

ふたりきりの教室は夕日に照らされて眩しく思えた。

「雨…。」

「え?」

「雨。降らねえかな。」

「なんで…?」

雨なんか降る気配はなかつた。

「なんでじょい?」

悲しいからだよね?

渚音は空が好きだから、空分色に空が変わつてしまいんだよね?

唯愛はそつ思つたが口に出せなかつた。

次の日、唯愛が学校に行くと教室が騒がしかった。

「どうしたの？」

「転校生が来るんだって！」

それもすつごく顔の整った男の子ぶりしこよー。」

「この時期に？可笑しくない？」

「まあまあ。そんな事どうでもいいでしょ！」

唯愛は少し納得できなかつたが気にはしなかつた。

「はーい。転校生を紹介します。どうぞ。」

先生の声と同時に教室のドアが開いた。

女子を中心に、男子も『おお』と声を出した。

教室に入ってきたのは、

キレイな明るい金髪を肩より少し長い髪をした男の子だった。  
小さな顔に大きな瞳。長いまつげに、どのペーツも  
美しく並んでいた。

男子と言わずに、制服でなければ女の子に見える。  
それも、そこらのアイドルやモデルよりも可愛い。

「睦月真凜です。

こんな時期に転校してきて可笑しいですけど、  
よろしくお願ひします。…あれ…？」

真凜は自己紹介の途中に田を見開き渚音の方をじっと見た。

「渚音？」

「なんだ。浅木、睦月と知り合いなのか。

睦月、浅木の隣の席に座れ。以上！」

真凜は渚音の隣に座ると、懐かしそうに笑つて話しだした。

先生の長い話が終わると、たちまちに真凜の周りには人が集まつた。  
別クラスの生徒達もどこからかぎつけたのか廊下から教室内を覗い

ていた。

その中で真凜はしばらく無邪気な笑顔で笑っていたが、すくつと立ち上がった。

そして口元に笑みを浮かべながら唯愛の席に近づいた。

「天見さんだよね？」

別れを知つて、出会いを知る。

それが人生、そして、運命。

笑顔でいても心の中は違つて……。

どんな運命であろうとも、『私』は『貴方』と出会い

辛いことも嬉しいことも傍にいたいと願うのだらう。

それが運命だから。

そう信じたいから。

そんな運命を歩みたい……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2054f/>

---

永久への想い

2010年10月9日01時13分発行